平成 29 年度(2017 年度)
日本特別活動学会　第４回　実践事例募集事業

推　奨　事　例

事例番号　４－５

友達との関わりを広げる学級活動(1)の指導

福岡県直方市立下堺小学校　　桑　野　美　咲

実践テーマ	友達との関わりを広げる学級活動（１）の指導
実践区分	学級活動・ホームルーム活動　児童会・生徒会活動　クラブ活動　学校行事 その他（具体的に、　　）
実践事例の背景、ねらい、意義など	本実践までに、学級活動の時間に話し合い、様々な集会活動を行ってきた。１年生という発達段階に合わせ、本学級児童にとって身近な遊びについて話し合い、決まったことをすぐに実践することを通して、みんなで活動することの楽しさを味わう経験を少しずつ重ねてきている。しかし、話合いの仕方はまだ十分に身についておらず、友達との関わりも偏りがある。そこで、本実践では、友達との関わりを広めることができるように、これまでの実践よりも準備の期間を長くしようと考えた。また、話合いの仕方を分かりやすくするために、活動計画や児童の意見の分類等を工夫しようと考えた。この実践全体を通し、話し合って決め、実践することの良さを味わわせたり、友達との関わりを広めたりしたいと考え、本実践を行った。
実践の時期	平成２９年　１１月

1　児童の実態

本学級の児童は、本実践までに、学級活動の時間に話し合い、しっぽとりやじゃんけん列車等の遊びを全員で行ってきた。子どもたちにとって身近な遊びについて、教師と共に学級会で話し合い、決まったことを実践することを通して、みんなで活動することの楽しさを味わう経験を重ねてきている。しかし、話合いの仕方がまだ十分に身に付いておらず、話合いの流れから逸れた発言をする子どもも多い。また、子どもたちの関わりには偏りがあり、固定された友達と過ごす場面も多く見受けられる。

そこで、本議題では、子どもたちが、話合いの進め方に沿って話し合い、秋のおもちゃまつりを盛り上げる工夫について、全員で決めることができる学級会を目指したいと考えた。また、準備や実践を通して、子どもたちの関わりを広げたいと考えた。

2　学級活動（1）の実践

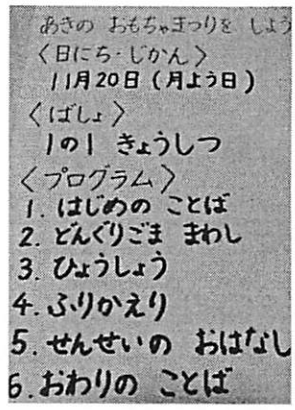
（1）　議題「あきの おもちゃまつりを しよう」

（2）　提案理由 「どんぐりがたくさん落ちていて、みんなでおもちゃを作って遊んだら、楽しそうだと思ったから。」

（3）　話合いの柱「秋のおもちゃまつりをもっと楽しくする工夫」

3　事前の活動

生活科の学習で、学級全員で秋見つけに行った。そうすると、たくさんのどんぐりが落ちていたため、拾い、持ち帰らせた。次の日、ある子どもが、そのどんぐりを使って様々なおもちゃを作ってきたのを他の子が見て、「みんなでおもちゃ作りをしたい。」「作ったおもちゃで、みんなで遊びたい。」、という会話があった。そこで、話していた子どもたちに働きかけ、議題案を一緒に考え、学級全体に提案し、議題化した。その後、活動の全体計画（資料１）と、学級会の活動計画を作成し、学級全体に提案し、説明を行った。おもちゃ祭りでは、「どんぐりごまを作って、回したい。」と考える児童が多かったため、「何をするか」については、「どんぐりごま回し」をすることに、あらかじめ決めておいた。そして、子どもたちには、事前に、「秋のおもちゃまつりをもっと楽しくする工夫」について、自分の考えを学級会ノートに書かせ、事前に集約しておいた。


あきの おもちゃまつりを しよう
〈日にち・じかん〉
11月20日（月ようび）
〈ばしょ〉
1の1 きょうしつ
〈プログラム〉
1. はじめの ことば
2. どんぐりごま まわし
3. ひょうしょう
4. ふりかえり
5. せんせいの おはなし
6. おわりの ことば

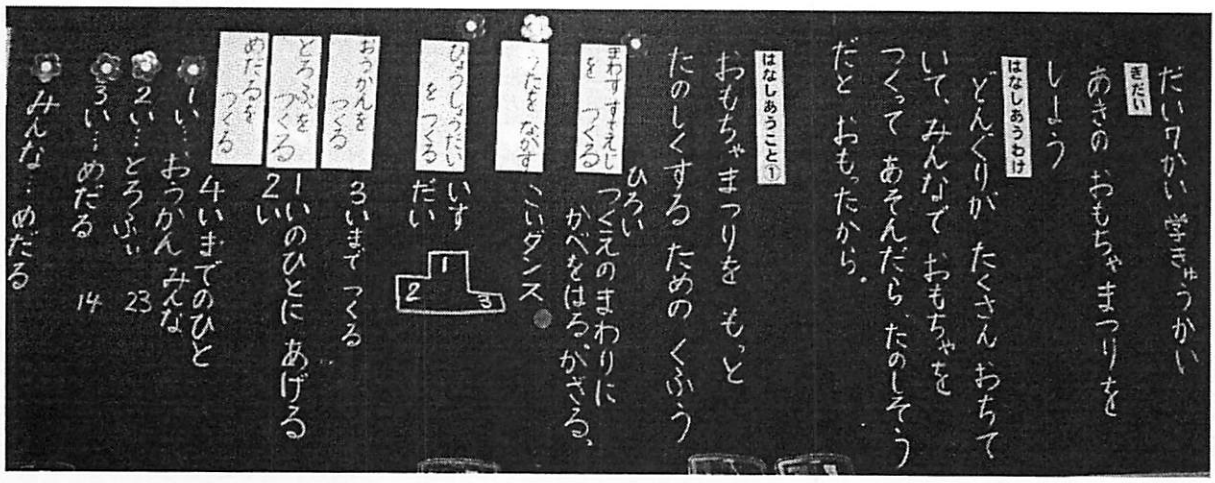
（資料１）

4　本時の活動

子どもたちが、時間内に決めることができるように、学級会の柱は、「秋のおもちゃまつりをもっと楽しくする工夫」の１つに絞った。また、時間や話合いの流れがわかるように、学級会の活動計画を掲示しておいた。（資料２）

子どもたちからは、「こまを回すステージを作る」「歌を流す」「表彰台を作る」「王冠を作る」「トロフィを作る」「メダルを作る」の意見が出た。子どもたちから出た意見は、子どもたちがおもちゃ祭りの流れを想像しやすいように、「どんぐりごま回し」に関わるもの、「表彰」に関わるもの、「表彰」のときに渡す物の順に並べた。子どもたちの間で、こまのおもちゃが親しまれているため、「こまを回すステージ」は、賛成意見が多かった。話合いの中では、どのようにして作るかについての意見が多く出た。「段ボールを使って作る」「机の周りに貼って、壁のようにする」という意見が出て、実際に教室においていた段ボールを使って子どもたちに見せながら、話合いを進め、段ボールに飾りをつけ、机のまわりに貼って壁のようにしたステージを作ることに決定した。また、「表彰台を作る」という意見は、これまで、子どもたちがオリンピック等の表彰場面をテレビで見たことによるものであった。学校の行事等では、行ったことはなかったため、「してみたい」という意見が多かったが、どのようにして作るのかについて、子どもたちが意見を出した。実際に、子どもたちが出したアイデアのように、椅子や台に画用紙を貼って見せながら、「表彰台を作る」ことに決定した。表彰時に渡す物については、どれも取り入れたいという意見が出て、順位によって渡す物を変え、また、一番簡単に作ることができるメダルは、全員に渡すことになった。子どもの意見を順に取り上げながら、４５分で話合いを終えることができた。（資料３）

（資料２）



（資料３）

５　事後の活動

次の日の朝の会の時間を使い、どんな係が必要か、子どもたちに聞きながら役割分担を行った。そして、休み時間等を使い、実践へ向けて準備を行わせた。これまでの実践に比べ準備するものが多く、準備期間も長かったのだが、子どもたちは、本番直前まで普段関わりの少ない友達と一緒にステージや表彰台を作ったり、飾り付けをしたりすることができた。ステージの壁やメダルには、「みんなすごい！」

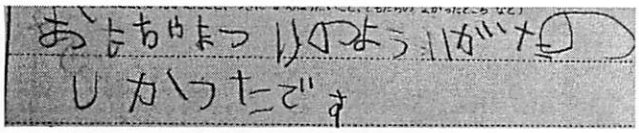
「がんばったね」と書かれており、どんぐりごまを回すことの勝ち負けよりも、みんなでおもちゃ祭りを盛り上げようとする姿が多く見られた。秋のおもちゃ祭り本番でも、いつも一緒にいる友達だけでなく、みんなでこまを回したり、祝いあったりして楽しそうにする姿が見られた。（資料４，５）

（資料４）

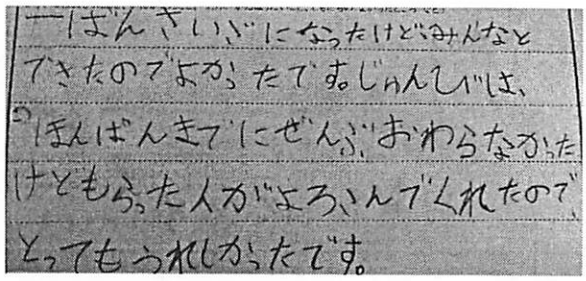
（資料５）

６　子どもたちの振り返りから

実践後に、振り返りを行った。「おもちゃ祭りをして楽しかった。」「みんなでできてよかった。」「またみんなでしたい。」という意見が多かったが、「負けたので悔しかった。」という、勝ち負けのみの内容もあった。また、「お友達と準備ができたのでよかった。」「本番までに終わらなかったけれど、もらった人が喜んでくれてよかった。」と、書いている子どももいた。（資料６，７）これまでの実践では、準備の段階についての振り返りは少なかったが、本実践では、本番だけでなく、準備の段階で友達と関わることの楽しさを味わうことのできた子どもが増えた。



（資料６）



（資料７）

７　成果と課題

○　子どもたちの意見を分類して黒板に書いたり、話合いの流れを大きく掲示したりしたことで、流れに沿って話し合わせることができた。

○　学級会で、実際に試しながら話し合ったことで、子どもたち自身で準備を行いやすくなり、子どもたちの関わりを広めることができた。

●　勝ち負けにこだわる子もいたため、提案理由や目的をわかりやすく伝えておく必要があった。